

自分から

姫路市立白鷺中学校 三年 澤田 絢香

中学生になってから、夏休みの課題となった人権作文。何について書けばよいのかを悩む中で毎年、一番最初に頭に浮かぶのは、障害について書くかどうかです。一年、二年もそう思いましたが、自分が聴覚障害者でありそして様々な障害を自分自身がどこまで理解し、思いを伝えられるのだろうかと難しく考えてしまい、書くことができませんでした。しかし、今年三年生になり、学校生活の中で力を合わせて一つの事をやり遂げたり、部活動で仲間と過ごす中で、今感じている事を素直に書こうと思います。

私は両耳感音性難聴です。生後三ヶ月の時に両親は医師から告げられました。「検査で全く反応がありませんでした。詳しく検査しないと分かりませんが補聴器をつけないと飛行機や太鼓の音しか聞こえません。」

と。母は何が何だか理解できず、涙が溢れ、放心状態になってしまったそうです。父も母もお互い何も話さず、父は淡々と食事をし、昼寝をしたので母はこんな時によく食べて寝れるなと思ったそうです。父は起きて母に、

「難聴は治らないから、これを受け止めるしかない。親としてできる事をやるだけや。」と言ったそうです。それから補聴器をつけ、母は手話を覚え言葉を一生懸命私に教えてくれました。しかし、小学校一年生の時、校内で音楽会がありました。音楽会を見に来た母は、大きな声で歌う私の周りの子供たちが私の音程のひどさにしかめっ面をして、少し距離をとっていたのを見て、私に

「大きな声で歌うのはとても良い事なんだけれどちょっと音程が外れているから、周りのみんなが歌いにくいみたい。足に障害がある人が速く走れないように、耳に障害があるから上手く歌えないのは仕方がないのよ。だから、小さい声で歌おうか。」と私が傷付くのを覚悟で本当のことを伝えたそうです。母自身も、大きな声で歌うことは普通、褒める所なのにそれを否定するのは辛かったそうです。私は歌うことが好きだったので、とてもショックを受けた事を覚えています。今、考えると音程が外れている事を、友人の様子などから感じ取って、自分は音痴だったんだと後々気付くよりは、小学校一年生の時に母から伝えてもらって良かったと思っています。

今、私は周りの友人たちにとっても感謝しています。中一までの合唱コンクールの時は、合唱嫌だな、小さい声で歌っていても、音程外れて、みんなに迷惑かけていないかな、と不安に思っていました。しかし、中二の時、クラスの友人たちが課題曲を一生懸命練習している姿を見て、初めて私も友人たちと一緒に歌いたい、と心の底から熱いものがこみ上げてきました。そして同パートの友人たちにその思いを伝えました。自分は音階

がとても高いか、低いかしか聞き取れないから、音程が分からなくて音痴になると。そうしたら、その友人たちは、私たちが音程を直すから、一緒に歌おうよ、と真正面から受け止めてくれ、個人的に一緒に練習してくれました。音程が外れていたら、適切なアドバイスをして直してくれました。自分の障害のことを、自分自身が理解し、どうやって助けてほしいかを考えた上で相手に伝えることで、自分が参加しやすい、楽しめる行事になるんだということを初めて知りました。相手の反応を怖がらずに思い切って言うてみるのが、自分にとっても過ごし易い環境を創ることにつながりました。練習しても本番では、コーラスが乱れる、と思いきわで歌いましたが友人たちと同じ気持ちで練習に取り組めたのは友人たちが助け、支えてくれたお陰です。私の人生を変えた大きな経験でした。友人の大切さを知り、私も友人たちの力になりたいと思いました。これからも、自分からの発信行動にチャレンジしていきたいと思っています。

私が、十五年間障害者として生きて、思うことは、障害者差別はまずお互いが無知であるという事から始まり、そして、理解し合うという行動がなされていないからだと思います。理解し合うには障害者、健常者であるという前に両者とも人であるので人として考え方が似ていたり、色々な部分を認めあつたりした上で障害を理解できていくんだと思います。

今回は、聴覚障害者である私の視点からこの作文を書きましたが、世間には他の障害を抱えている方々が大勢います。同じ障害者として、相手の立場に立ち、理解し、接していこうと思います。少しの思いやりや配慮だけで、障害者だけではなく、この世界中のすべての人々が幸せに生きられる、そんな世界にできると 생각합니다。